# 2009年度・研究旅行奨励制度　【個人旅行】

| 名　前 | 松本　優 | 研究テーマ | ユートピアの理想と実現―埼玉県「新しき村」 |
|---|---|---|---|
| 目的地 | 国　名 | 地域・都市名 | |
| | 日本 | 埼玉県入間郡、東京都　など | |

| 研究旅行の目的 |
|---|
| 卒論のテーマである『風の谷のナウシカにおけるユートピア』の研究の一環として、ユートピアを実現しようとしている、あるいは実現しているとされる場所の現状を現地調査したい。今回研究対象としたのは、大正期、武者小路実篤が創立した「新しき村」である。その精神に、「全人類同胞の思想・人類平和共生の理想」を掲げ、埼玉県のわずかな土地に理想郷としての「新しき村」を創った。創立 91 年目を迎えるこの村で、武者小路実篤の理念・倫理をもとに村の現状を調査し、その上で創立者の理念との矛盾、「新しき村」がユートピアたる所似を考察したい。 |
| **期待される成果** |
| 村内生活者および、支援者からの聞きとり、現地調査、武者小路実篤美術館における資料の収集により、創始者である武者小路実篤の理想的社会創立の理念と「新しき村」の 90 年の歴史において、問題点、現状における課題を見出す。そのことから、机上のユートピア論理と実際にユートピアを実現しようとしている現実世界の差異を検討出来るのではないかと思われる。 |

**旅行日程表**

旅行期間：　2009年　8月31日～9月6日　　[7日間]

| | | |
|---|---|---|
| 第１日目<br>８月３１日 | 東京 | 移動日<br>「武者小路実篤美術館」（調査市）にて「新しき村」の資料収集 |
| 第２日目<br>９月１日 | 埼玉 | 「新しき村美術館」にて「新しき村」の資料収集 |
| 第３～４日目<br>９月２日<br>～９月３日 | 埼玉 | 「新しき村」現地にて、村全体の散策<br>村内生活者への聞きとり調査 |
| 第５日目<br>９月４日・５日 | 東京 | 東京調布　武者小路実篤記念館：武者小路実篤記念館資料観覧 |
| ９月６日 | 東京 | 東京神保町　新しき村東京支部「新村堂」（神保町）：月例会参加<br>意見交換に立ち会う |

〔報告書〕

【目的】

今回の研究旅行の目的は、「理想郷」を訪ねることである。「理想郷」は、「ユートピア」と同義であり、これらは「想像上に描かれた理想的な世界」と定義される、存在しないものである。しかし、今回私が訪れた「新しき村」は、武者小路実篤が、「人間らしく生きる」「自己を生かす」理想社会を求めて創立、理想を実践して今年創立 91 周年を迎える村である。この実存する「理想郷」について、実際に現地を訪れ、村の実態、「理想郷」の構成員としてそこに住む村民の方々へのアプローチを通して、「新しき村」を「理想郷」という概念から考察したい。

【新しき村と武者小路実篤】

「新しき村」は、大正八年、「自己を生かし、共に生きる社会」を目指し、武者小路実篤を中心に宮崎県児湯郡に創設された。実篤が「新しき村」を創設するに至る背景には、実篤が学生時代に夢中になったロシアの思想家レフ・トルストイの影響がある。トルストイが唱えたキリスト教的な無償愛や奉仕の生活を善しとする精神は、実篤の人生に大きな影響を与え、「新しき村」創設の原動力ともなった。また大正六年のロシア革命、翌年の米騒動やシベリア出兵が起こる当時の社会状況による後押しもあった。昭和十三年、小丸川のダム建設工事のため、村の土地の一部が水没することになり、昭和十四年、埼玉県毛呂山町に第二の「新しき村」が創設された。現在の「新しき村」は、主力を埼玉に移し、農業を中心とした活動が続けられている。創立当初、村の収入の九割を実篤の文筆活動に頼っていた村も、創立 40 年の昭和 33 年、経済の自活を果たした。また、村では、毎日の 6 時間の義務労働のほかは、自由時間に芸術活動、文筆活動、機関誌の発行、音楽や詩を楽しむことなどが推奨された。

「新しき村」で活動する人々は「村内会員」と「村外会員」に分けられる。「村内会員」とは実際に村に入って生活する人々のことであり、「村外会員」とは、村の精神に賛同し、村の精神の普及や、村の活動を支援する人のことである。現在、日向「村内会員」4 名、埼玉「村内会員」13 名、「村外会員」約 300 名で村の活動は行われている。

【新しき村の精神】

一、　全世界の人間が天命を全うし各個人のうちにすむ自我を完全に生長させることを理想とする

一、　その為に、自己を生かす為に他人の自我を害してはいけない

一、　その為に自己を正しく生かすようにする。自分の快楽、幸福、自由の為に他人の天命と正しき要求を害してはいけない

一、　全世界の人間が我等と同一の精神をもち、同一の生活方法をとる事で全世界の人間が同じく義務を果せ、自由を楽しみ正しく生きられ天命（個性もふくむ）を全うする道を歩むように心がける

一、　かくの如き生活をしようとするもの、かくの如き生活の可能性を信じ全世界の人が実行することを祈るもの、又は切に望むもの、それは新しき村の会員である。我等の兄弟姉妹である

一、　されば、我等は国と国との争い、階級と階級との争いをせずに、正しき生活にすべての人が入る事で、入ろうとする事で、それ等の人が本当に協力する事で、我等の欲する世界が来ることを信じ、又その為に骨折るものである

【研究旅行・報告】

新しき村へ訪問。東京新宿から約 1 時間半、最寄り駅の武州長瀬駅へ到着する。村は最寄り駅より歩いて 20 分ほどの場所にある。比較的新しい家が立ち並ぶ住宅地とは田や水路で隔てられ、家の垣のように雑木林が村を囲んでいる。村の入り口には、二本の柱が立っており、武者小路実篤の肉筆で、「この門に入るものは自己と他人の生命を尊重しなければならない」とある。

村の道は、誰もが通り抜け出来、近隣の人が散歩道として利用しているが、田や雑木林によって隔てられた敷地、村の入り口の注意書きのような柱は、村が周辺地域から孤立する印象を与えた。柱を抜けるとすぐ、村の旗が掲げられている。この旗は武者小路実篤がデザインしたもので、各人種を象徴する色を合体したものを、海と空の青が包み込んでいるイメージだという。それは、村の精神である全人類同胞の思想・人類平和共生の理想を表現している。

村への滞在の間は、村外会員が宿泊するための施設に宿をとった。村への滞在は事前の連絡で、村の話し合いで了承されていた。

約 10 ヘクタールという敷地には、田畑、果樹園、雑木林のほか養鶏場、食堂兼公会堂、美術館、納骨堂、公民館、村内会員の住居、村外会員の宿泊用住居がある。点在する畑には、花、シソ、茶、椎茸が栽培され、管理されていた。ただ、村全体としては、休田している土地や、使用されてないビニール

ハウス、養鶏場、パン工場など、現在利用されず土地や建物だけが存在しているところが多くあり、村の資本はあるが、働き手がいない現状を垣間見た。

村では月に二回村の集会があり、夜 8 時から行われる「諸問題の会」「仕事の会」では、村での問題や、仕事について、村の人々全員で話し合う。村へ入った初日は「仕事の会」の日に当たり、話し合いに参加することが出来た。「仕事の会」では、主に村の仕事について各自担当持ち場の報告をする。村の義務労働は、主に農作業である。米、シイタケ、茶などは村での食糧となるだけでなく、村外に出荷することで村の重要な収入源ともなっている。その中で、同じく村の収入を担っているのが養鶏である。人工飼料で育てられた約 7000 羽の鶏の卵は、高品質で村外からの買い付けも多く、村と周辺地域との繋がりにも貢献している。話し合いでは、養鶏について担当する 2 人のうち 1 人が、仕事を変更してほしいと申し出た。村の仕事の中でも、養鶏は規模や仕事内容において一番責任が重い。結論として、村においては他に仕事がないこと、それゆえに義務労働が果たせないこと、などの理由から離村の運びとなった。

また、食事の時間については、あらかじめ決められており、炊事担当者が全員の食事を作る。共同の食堂も、そこで食事をするものはわずかで、ほとんどの人は用意された料理を自分の家へ持ち帰り、食事をする。過去は、村に住む人々が入りきれないほど皆で食事をしていた食堂が、現在は食事時になっても静かなままだ。先の「仕事の会」での話し合いにおいても、他の仕事を手伝うという選択肢はないようで、それぞれ担当の仕事に関しては、他の介入は望まないという点もあり、共同生活、協力のもとにある村の理念と実情の溝を垣間見た。

実篤は、義務労働において生活が保障される他は、自己の個性を生かすよう努めた。過去においては、陶芸や絵画など芸術活動に励む人もいれば、詩や音楽、芝居を楽しむ風潮もあったという。村には、当

時の作品を収めた展示室もある。しかし、現在村では、毎月の機関誌「新しき村」の他は、そのような活動はない。その点においては、精神的な面における村の実践がない。

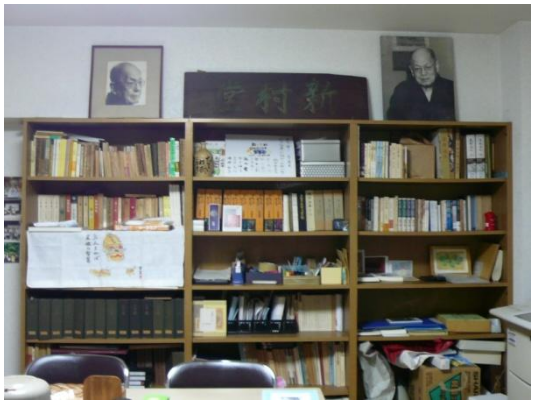
また、村の精神について、実際に村に住む人々の解釈も一様ではない。村に住む村内会員の方々にお話を伺う中で、入村理由として実篤の思想に共感したという答えを全員に頂いた。実篤の著書や、ラジオなどきっかけは様々であったが、実篤の思想にふれ、感銘を受けたという。しかし、実篤に対する評価とは別に、村の精神については、一貫した信仰というものがない。その点において、村が宗教団体のような類とは異なるところで活動していると言える。前述した「新しき村の精神」において、実篤は「新しき村の理念が、全人類の意志だ」と述べているが、その解釈において、「実篤の唱えた精神の実現が可能である」という方もいれば、「理想としては立派だが、現実的ではない」という方もいた。会員という形をとり、精神や理念のもと存在している新しき村の在り方について、宗教的に見られる部分に関しては、抵抗があるという意見もあった。会員集めということに関しては、事実実篤も、村内会員はもとより、村外会員を増やすことを奨励し、尽力した。村の精神普及という名目ではあるが、村の生活の為に会員の会費を集めるという目的もあったと思われる。実篤は村の会報「新しき村通信」（1930 年 9 月号）においてこう述べている。

「村外会員の内経済事情のゆるす人はこのさい、毎月の会費を任意に五十銭づつにしたい。三十銭送るかはりに五十銭送つてほしい。之が実行出来れば、日向の新しき村は二三年の内に自活出来、新しき村のその後の生長は目覚ましい事になると思ふ。」

それは創立当初の安定しない村の経済の為にはやむを得ない処置であったが、その後数十年逼迫する村の経済状況は、実篤の私財に大きく依存していた。村の存続の為に会員を増やすのではなく、村の精神に賛同することで会員が増えるというのが本来の在り方であるものの、当時は村を存続させることが最優先事項だったようだ。

経済の自活を果たした現在においても会員の確保については、村にとって死活問題であることに変わりない。ことに、村内会員においては、実際に村に生活している 13 名の内、働き手は 8 名、他は高齢の方々であり、仕事に対して、人手が足りないというのが実情である。この現状に対して、「村を存続させるためにも村外会員を増やすことが必至だ」という方もいた。しかし、中には「人手が足りないということは村においてない。今いる人数だけの仕事をすればいい。それが新しき村だ」という方もおり、「（会員は）勧めてなってもらうものではない」という方もいた。村に住む会員については、村外会員支部の拠点である東京支部の月例会でも議題にあがり、入村者がいないことについて話し合われた。対

策として、インターネットを使った PR 活動の充実させることなどの案が出た。しかし、あくまでも会員の募集ではなく、村の精神を普及させることに重点を置く旨が確認された。



その他、村の敷地内にある新しき村美術館、東京調布市にある武者小路実篤記念館では、新しき村に関する資料、実篤の作品など、現地にしかない資料採集をすることが出来、様々な情報を得た。ことに実篤は、文学者としてのイメージが強かったが、訪れた美術館、記念館には実篤の書画が多くあり、文学と並ぶ大家であることが感じられた。その作品の中には、新しき村に通ずる内容のものも多くあり、参考になった。記念館に併設する実篤公園は、実篤が晩年過ごした旧宅がある、自然あふれる森であった。自然をこよなく愛した実篤は、多くの植物を画に描いている。

【まとめ】

村の美術館の資料の中に、創立 60 周年のテレビ取材を受ける当時の村内会員の言葉に次のようなものがあった。

「創立から 50 年は建設期だった、しかし 60 年経った今は充実期である」

この言葉をもとに、現在村に住む方々に、「今、村は例えるならば何期か」という質問をした。そのなかで、「村 90 年は足踏み期」だという答えがあった。昨年創立 90 周年を迎えた村は、実際に村で生活

する人員不足において、今確かに存続の危機を迎えている。一方で、現在の労働力不足は、村に限らず、日本全体の状況においても同じことが言える。その点においては、村に全ての原因があるようには思えない。しかし、村に人がいなくなっては、村の精神がいくら立派なもので、皆の理想であるとはいっても、それは間違いであったと言わざるを得ない。実篤の言葉にも、それは認められる。

「第一線にゐて、土地を相手にして大地の上に真の新しき村をつくらうとする兄弟姉妹がいなければ、勿論新しき村はつぶれるわけである。思想としては存在しても、それこそ空想的なものになり、誰も住みたくない、又存在出来ない村ということになる。」

しかし、同じ質問に対して、「人類全体でいえば、村はずっと建設期である」と答えてくださった方がいた。「村の活動は千年の仕事」だという意見もあった。新しき村は、「全人類が自己の天命（個性）を全うすることが可能となる世界の実現」という目的の為に、これからも存在し続ける、その一役を担っているという意識を、多くの会員の方々の中に感じた。実際の村には、「理想郷」のもつ「楽園」のイメージはなく、人間社会が持っている様々な問題がそこには存在している。人間関係、経済問題など、人間が生きていく上で、省略できないものである。その点において、新しき村は単純に理想郷といえるものではない。しかし、確かな事実は、「理想社会のモデル」になるという信念のもと、実際にその村が存在しているということである。少なくとも、90 年の間それが維持され、存続している事実である。その価値は、評価されるべきものである。

最後に、実篤の村に対する思いを紹介して、報告とする。

「新しき村は人間の生る処　自己完成の道場　人類の意志の生る処なり。」

[参考文献]

「新しき村 80 年」　調布市武者小路実篤記念館　発行

「新しき村　第六十一巻　第四号」　新しき村　発行

「武者小路実篤全集　第十七巻」

「証言　昭和農民史　理想郷を求めて―新しき村の歳月」　NHK 教育